

令和 8 年度入学 看護学部 一般選抜・後期 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	伊藤 亜紗	目の見えない人は世界をどう見ているのか	2015年 pp.29-37 より 一部改変 光文社新書	光文社

令和 8 年度 一般選抜・後期

看護学部

小論文 (90 分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、4 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(150 点)

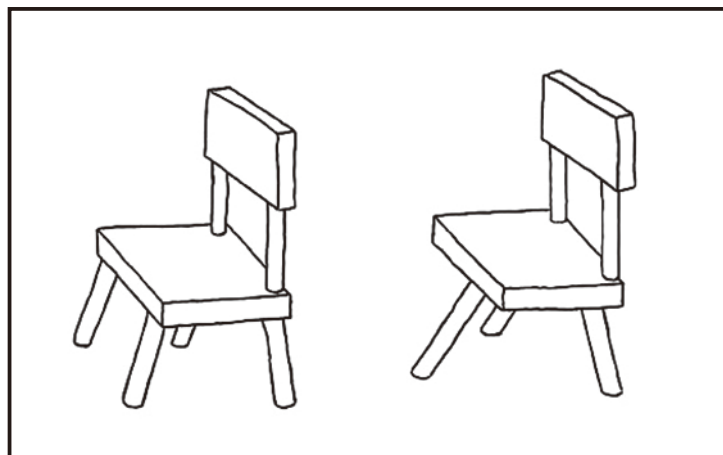
見えない体に変身したいなどと言うと、何を⁽¹⁾フキンシン⁽¹⁾な、と叱られるかもしれません。もちろん見えない人の苦勞や苦しみを軽んじるつもりはありません。

でも見える人と見えない人が、お互いにきちんと好奇の目を向け合うことは、自分の⁽²⁾モウモク⁽²⁾さを発見することにもつながります。美学的な関心から視覚障害者について研究するとは、まさにそのような「好奇の目」を向けることです。後に述べるように、そうした視点は障害者福祉のあり方にも一石を投じるものであると信じています。

ではいったい、どのようにして「見えない体」に変身すればよいのか。そんなの簡単だよ、視覚を遮ればいい、目をつぶったりアイマスクをつければいいじゃないか、と思われるかもしれません。

いいえ、視覚を遮れば見えない人の体を体験できる、というのは大きな誤解です。それは単なる引き算ではありません。見えないことと目をつぶることとは全く違うのです。

見える人が目をつぶることと、そもそも見えないことはどう違うのか。見える人が目をつぶるのは、単なる視覚情報の遮断です。つまり引き算。そこで感じられるのは欠如です。しかし私がとらえたいのは、「見えている状態を基準として、そこから視覚情報を引いた状態」ではありません。視覚抜きで成立している体そのものに変身したいのです。そのような条件が生み出す体の特徴、見えてくる世界のあり方、その意味を実感したいのです。



それはいわば、4本脚の椅子と3本脚の椅子の違いのようなものです。もともと脚が4本ある椅子から1本取ってしまったら、その椅子は傾いてしまいます。壊れた、不完全な椅子です。でも、そもそも3本の脚で立っている椅子もある。脚の配置を変えれば、3本でも立てるのです。

脚の配置によって生まれる、4本のバランスと3本のバランス。見えない人は、耳の働かせ方、足腰の能力、はたまた言葉の定義などが、見える人とはちょっとずつ違います。ちょっとずつ使い方を变えることで、視覚なしでも立てるバランスを見つけているのです。

変身するとは、そうした視覚抜きのバランスで世界を感じてみるということです。脚が1本ないと

(A)

いう「欠如」ではなく、3本が作る「全体」を感じるということです。

異なるバランスで感じると、世界は全く違って見えてきます。つまり、同じ世界でも見え方、すなわち「意味」が違ってくるのです。

(中 略)

そもそも「意味」とは何でしょうか。「意味」のニュアンスは、「情報」と対置すると明らかになります。

「情報」は、客観的でニュートラルなものです。たとえば、「明日の午後の降水確率は60パーセントである」。これはふつう情報として受け止められます。友人の「明日の午後の降水確率は60パーセントだよ」という発言に対して「ありがとう」と言ったら、それは「情報をありがとう」「大事な情報を教えてくれてありがとう」という意味です。

それに対して、たとえば恋人の言う「あなたは石頭だ」を情報として受けとってしまったら、きっと次にくるのは別れの言葉でしょう。これはむしろ感情のトロ⁽³⁾です。ここであなたがすべきなのは、メモをとることではなく、恋人の感情に対して、なだめるなり反論するなり、アクションを起こすことです。

報告者が自分の主観を述べたものは情報ではありません。情報とは、報告者の主観を排した、客観的な内容のことを指します(天気予報だって厳密には予報士の「判断」なので、そもそも本当に客観的な情報など存在するのか、という疑問にはここでは立ち入りません)。

しかし、この「明日の午後の降水確率は60パーセントである」という「情報」は、受け手次第で、無数の「意味」を生み出します。明日運動会を控えた小学生なら、この情報は「運動会が延期になるかもしれない」ということを意味するでしょうし、傘屋なら「明日は儲かるな」、農家なら「朝の水やりは控えめにしよう」となるでしょう。あるいは災難つづきの1日を過ごした人なら、ここに何かの暗示を読み込むかもしれない。

つまり「意味」とは、「情報」が具体的な文脈に置かれたときに生まれるもののなのです。受け手によって、どのような状況に置かれるかによって、情報は全く異なる意味を生み出します。

(中 略)

「意味」や「価値」というとずいぶん人間的なもののように思われますが、そんなことはありません。昆虫や動物も立派な意味の構成者です。このことを分析したのは、エストニア生まれの生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルです。ユクスキュルは1930年代という早い時期に「環世界」というガイネンを提示して、生物学のみならず哲学をはじめとしたさまざまな学問領域に影響を与えました。⁽⁴⁾

ユクスキュルの著作を翻訳している生物学者、日高敏隆の『動物と人間の世界認識』を手がかりに、ユクスキュルの「環世界」とは何かひもといていきましょう。

初夏、キャベツ畑にモンシロチョウが飛んでいます。しかし時間帯によって、モンシロチョウにとってのキャベツ畑の見え方は違います。午前中は交尾の時間帯です。オスは、交尾の相手を求めてキャベツ畑を飛び回っています。メスにとってもオスの存在こそが重要です。実際にはあたりに葉や

花が存在しているのですが、全く目もくれません。

ところが午後になると、空腹になるのでしょうか、モンシロチョウたちは今度は花の蜜を求めるようになります。急に、花が「見え始める」のです。しかも、重要なのは咲いている花。つぼみではなく開いた花だけが、意味のあるものとして、モンシロチョウたちの世界を構成するようになります。

ユクスキュルにとって、それぞれの生きものは、意味を構成する「主体」です。個々の「主体」は、周りの事物に意味を与えてそれによって自分にとっての世界を構成している。この「自分にとっての世界」が「環世界」と呼ばれるものです。生きものは、無味乾燥な客観的な世界に生きているわけではありません。自分にとって、またそのときどきの状況にとって必要なものから作り上げた、一種のイリュージョンの中に生きているのです。

主体が周囲の事物にどのような意味を与え、それがどのような環世界を作り出しているのか。本書は、そうした「意味」を切り口として、見えない人と関わっていかうとするものです。

それは探求の方法であると同時に、見えない人と見える人の関わり方の提案でもあります。というのは、見える人が見えない人に対してとる態度は、一般的にはどうしても「情報」ベースになりがちだからです。そこに「意味」ベースの関わりも追加していきたい、という意図があります。

「情報」ベースの関わりとは何か。乱暴に図式化してしまえば、それは福祉的な関係です。見える人が見えない人に必要な情報を与え、サポートしてあげる。見える人が見えない人を助けるという関係がこの福祉的な発想の根本にはあります。

実際、福祉は情報への配慮であふれています。たとえば点字ブロック。言うまでもなく点字ブロックは、「駅はこちらです」等の「情報」を視覚障害者に与えるために設置されています。横断歩道に設置されている音響信号も、「止まれ」や「進め」の「情報」を与えることが目的です。

こうしたインフラ面での福祉事業だけでなく、人的なサービスも情報に主眼が置かれています。たとえば図書館の対面朗読サービス。ここでは視覚障害者が本に書かれた情報にアクセスできるよう、図書館スタッフやボランティアが内容を読み上げてくれます。点字ブロックや音響信号は、障害者が行動するのに必要な情報を与える福祉、対面朗読サービスは障害者の情報入手そのものを手助けする福祉です。そして近年は、このうち特に後者が重視されている印象を受けます。

そうした中でよく聞かれるのが、「アクセシビリティ」という言葉です。もともとは施設やサービスへのアクセスのしやすさ、その度合いを指す言葉でしたが、近年は、情報に対するアクセスのしやすさ度合いを指す言葉として使われることが多いように感じます。

さらに、この「アクセシビリティ」とセットでよく用いられるのが「情報格差」という言葉。そこにあるのは、ハンディキャップのある人とそうでない人の情報量の差、すなわち情報格差をなくすことが社会的包摂には必要だ、という考えです。こうした考えのもと、アクセシビリティを高めるためのさまざまな福祉的活動がなされています。

もちろん、こうした「情報のための福祉」は障害者にとって⁽⁵⁾フカケツで、これまでたくさんの試みがなされてきました。しかし、まだまだ不足している部分が残っていることは否めず、これについては社会をあげて補っていかなくてはなりません。

福祉制度そのものの意義を否定するつもりは全くありません。私が^{きく}危惧するのは、福祉そのものでなく、日々の生活の中で、障害のある人とそうでない人の^(B)関係が、こうした「福祉的な視点」にしばられてしまうことです。

つまり、健常者が、障害のある人と接するときに、何かしてあげなければいけない、とくにいろいろな情報を教えてあげなければいけない、と構えてしまうことです。そういう「福祉的な態度」にしばられてしまうのは、もしかするとふだん障害のある人と接する機会のない、すなわち福祉の現場から遠い人なのかもしれません。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』，光文社，2015 年，pp.29-37 より，一部改変)

問 1 下線部(1)～(5)を漢字で表しなさい。

問 2 二重下線部(A)に関して，作者は「変身する」ということをどのような世界の感じ方と意味しているか，本文から読み取り，80 字以上 100 字以内で説明しなさい。

問 3 作者が主張する「意味」ベースの関わりがどのようなものであるかを文章から読み取り説明しなさい。そのうえで，二重下線部(B)の主張をどのように考えるか，同意か反論かの立場を明確にしてあなた自身の考えを述べなさい。以上 2 点について，640 字以上 800 字以内で書くこと。